

---

# 演劇IFストーリー 星空と約束

きらきら星

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

演劇IFストーリー 星空と約束

### 【ZINE】

Z0700D

### 【作者名】

きりひら星

きりひらひら星

### 【あらすじ】

長い入院生活を強いられる凛のもとに彼氏の拓馬が一日だけの外泊許可を持って現われた。

(前書き)

本編『演劇団長は道化師やん』のエピストーリーです。  
本編とはまったく関係はないとも言えませんがとりあえずあります  
せん。

このお話を読んで凜と拓馬の関係を勘違いしないでください。

## 小さな白い部屋

小さな部屋の中の小さなベッドの上

白い壁に四角い外の世界

この小さな部屋が私の世界

私は一日が終るまでずっと滴が落ちてゆくのをじっと見てくるだけ

私はこの滴に生かされている。去年も一昨年もそのずっと前からじゅうじゅうと

あと何年生かされるのだひや。10年? 5年? 3日?

別にどうでもいいや

つまらない。こんな生き方なら生きていたくない。

そういうえば今日のお皿にはプリンが出たな……

あつ、今ので一万滴めだ。そろそろ拓馬がくるかな。

「凛、元気にしてるか」

「元気ならこんな所にいるわけ無いでしょ」

「おうおう、元気だな」

拓馬は土曜日の三時に来てくれる。拓馬は……彼氏かな

拓馬は私に外の世界の話をしてくれる。外で流行っていることや

最近あつたこと

私の中ではずっと前に止まってしまった世界を少しだけ動かしてくれる。

「今日は何の話をしてくれるのかしら」

「ふふふ、今日は話じやないぞ。俺に感謝しな

拓馬が自信ありげに一枚の紙を見せつけた。

これは…見たことがある。年に二、三回しか見たことないけど

「外泊許可が出たぞ」

「本当に本物なの、拓馬が書いたんじやないよね」

「ばーが、そんなことできるか」

「でもでも、どうして。お正月でもないのに」

「最近調子がいいからって一日だけ許可してもらえたんだ」

「7月のなんでもない日。突然起きた出来事に興奮が収まらない。ここ何年分かの喜びを全て集めたような出来事だ。

「それで凜、どこに行きたい」

「どこつて？」

「遊園地とかショッピングとかあるだろ行きたい所」

「そんなこと言われてもいきなりの出来事だ。行きたい所なんてわからない」

「それも外のことばよく知らない」

「でも、行きたい所はすぐに浮かんだ」

「どこでもいいよね」

「ああ、どこでもいいぞ」

「それなら……」

「で、どうして学校なんだ」

「いいじゃない。せつかく制服買つたんだし一度着てみたかったの」「初めて着た高校の制服。実を言うと私はこここの高校の生徒ではない。

「それどころか中学もちゃんと卒業していない」

「私の制服はまだ新しくしわ一つ無い。同じ歳の拓馬の制服はボロボロなのに」

「それもこんな遅くに」

「しようがないじゃない。私この生徒じゃないんだから」

「外はもう夜。人気の無い校内を私達はただとぼと歩いているだけ。」

「それでも楽しい。」

沢山の靴箱、バラバラに並んでいる机、汚れた黒板、ここは学校なんだ。

病院とは違つてここはあの小さな世界の何倍も早く時間が流れているような感じがする。

そして何より。

彼の腕を強く抱きしめながら彼の顔を見上げた。

「どうしたんだよ」

「なんでもない」

となりには拓馬がいる。

校内を一通り回った私たちは屋上に出た。  
目の前には街の明かりが広がっていた。

病院の窓からとは違う目の前に広く広がっていた。

その上には星空。街の光よりも小さな世界に見えたけど私は星の方が好き。

「凛、そろそろ帰ろうか」「

「嫌、絶対に嫌。今日はここで寝る」

だつて、帰つたら拓馬と一緒にいられないもん。

「たく、しようがないな」

冷たいコンクリートの上に一人ならなんで座つて星空を見ている。

「ありがとうね拓馬」

「なにが」

「今日付き合つてもらって」

「なに言つてるんだよ。付き合つてるんだからあたりまえだろ」「

「そつか……そうだよね」

拓馬は優しい。ずっとずっと拓馬の側にいたい。離れたくない。でも……

「拓馬、私……あと何年生きられるのかな」

「さあな、わかんねえ」

「そうだよね……」

私にすら分からぬのに拓馬にわかるはずがない。

ただ私は拓馬に励ましてもらいたかったのかもしない。

あの生かされている毎日を耐え抜くための何かを拓馬に貰ったかつたのかもしれない。

「ああ、わかんねえ。来年か来月か今週か分からない」

「そうだよね。いつか分からんんだよね。『ごめん、変なこと聞いて』

「でもよ。いつ終るかわからぬなら精一杯楽しんで笑つて生きてやればいいじゃないか」

「え」

「それでも少しでも生きていきたいなら星に願つてみるか

「星に?」

星空は少し曇り空。だけど、綺麗な星が見える。

「7月7日、願い事の一つでも聞いてくれるかもしないぞ

「そつか、今日は七夕だつたんだ。

お星様少しでも長く拓馬と一緒にいらっしゃるようにしてください。そう心の中で願いながら拓馬の肩に頭を乗せた。

「あと3分で7月8日だな。そつなれば俺達は18歳になるんだよな」

そう、7月8日は俺達一人の誕生日。

『あのね。18歳になつたら結婚しようつね』『ああ、約束だ』

小さな子供の頃の約束を未だに覚えている。

馬鹿だよな俺。子供の頃の馬鹿げた約束を守るために必死になつてさ。

必死になつてこんなもんまで買つてや

「おい、凜」

「んん、すうー拓馬……」

「寝ちまつたか」

俺は黙つて凜の左手の薬指に指輪をはめた。

「凛、好きだ」

「やべ、寝ちまつたか」

朝の肌寒さで目覚めた俺は凛の気持ちよさをひんてこむ顔を見てほつとした。

「おい、凛起きりよ。帰るぞ」

「……」

「おーい、凛

「……」

頬を突いてみたが反応が無い。嫌な予感しか頭を過ぎられない。

「凛……」

俺達の初めてのキスは冷たかった。

「工藤君、これ。凛のポケットに入っていたの」

凛の葬式の日。凛の母親から凛からの手紙を貰った。

本当なら俺がここにいること自体凛の親は許さないだろう。

凛に無理をさせてしまったのだから。

俺が病院から出さなければ凛はもっと生きていられたのかもしれないのだから。

凛の手紙にはこう書かれていた。

『拓馬ありがとうね。指輪すつごく嬉しかったよ。本当は自分の声で伝えたかったけど拓馬寝

ちやつてるんだもんね。駄目じゃない、起きてなきや。

実を言つとね。私の寿命三年前に終つていいって言われていたんだよね。

可笑しいよね。私まだ生きてるつて……

拓馬のおかげなんだよ。プリンの田たには拓馬絶対に来ててくれたか

「……」

拓馬の顔を見るたびに約束を思い出していた。笑つたりやつよね。

拓馬が子供の頃の約束覚えている訳無いよね。

でもね、その約束のおかげで私は今まで生きてこられた。ありがとう、拓馬。

この指輪があれば私、もう少し頑張れると思つから……

もう少しだけ頑張れるからまた来年も一緒に星空を見てくれますか?』

(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。

もしこれを読んでから本編を読んで『キャラ違うし』とか『出でないし』といつもコメントを頂けたら幸いです。

感想、評価、ほかのエフストーリーの要望なんでもOKなので何がありましたらお便りください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0700d/>

---

演劇IFストーリー 星空と約束

2010年10月28日03時36分発行